

村岡典嗣「PlatoノStaatノ研究」に関する一考察

本 村 昌 文

はじめに

本稿は、村岡典嗣（明治17年・1884～昭和21年・1946）の古代ギリシア哲学理解を検討し、彼の学問形成における古代ギリシア哲学のもつ意味を明らかにする一環として、大正10年（1921）、広島高等師範学校においてなされた講義のノートである「PlatoノStaatノ研究」について考察することを目的としている。

村岡典嗣は、明治44年（1911）に『本居宣長』を世に送りだし、「日本思想史学」という学問領域を切り開いた人物の一人として知られている。大正8年（1919）、広島高等師範学校に講師として着任し（翌年教授に昇任）、教育に従事する一方で、大正9年には「平田篤胤の神学に於ける耶蘇教の影響」（『芸文』11-3）、「橋守部の学説」（『学校教育』86）という宣長以降の国学の展開に関わる重要な論考を発表している。大正11年5月、文化史学研究のため、イギリス・フランス・ドイツ留学へ旅立ち（2年間）、大正13年3月に帰国後、4月より東北帝国大学法文学部に着任し、文化史学第1講座（日本思想史）の教授となった。その後、昭和21年（1946）3月に退職するまで、東北帝国大学において日本思想史研究および教育に従事した（1）。

村岡典嗣に関するこれまでの研究は、①村岡の日本思想史研究の方法論に関する検討、②村岡の学問の本質と特質の検討、③伝記的研究、④未公刊資料の発掘に大別できる（2）。以上の諸研究のうち、従来の研究では、①の方法論の検討が中心となってきたといえる。①の研究は、村岡の研究方法与ドイツの文献学、新カント派の歴史学との関わりに注目し、村岡がいかに客観的な研究方法を確立したかという問題意識に基づく研究からスタートし、その後、村岡の方法論のもつナショナリズム的な要素にも目を向け、彼の方法の限界と可能性を問う研究へと進展してきた（3）。以上のように、従来の研究では、村岡の方法論や学問形成にはドイツの文献学や新カント派の歴史学、またキリスト教を中心とした宗教哲学などの影響に関する指摘はあるものの、古代ギリシア哲学についてはほとんど検討がなされてこなかった（4）。

それでは、村岡の古代ギリシア哲学理解を検討する意味はどこにあるのだろうか。まず資料の側面から考えてみよう。村岡の講義ノートや資料ノートなどは、現在「村岡典嗣文書」として東北大学史料館に所蔵されている。その「村岡典嗣文書」の中には、「Herakleitosの研究」（明治41年・1908、村岡Ⅱ・1-1）、「〔ギリシア哲学関係原稿〕」（大正5年・1916、村岡Ⅱ・1-2）、「Herakleitos」（大正5年・1916、村岡Ⅱ・1-3）、「Herakleitosノ哲学ノ研究」（作成年不明、村岡Ⅱ・1-4）と

いう4種類の資料メモや講演原稿に加え、大正10年（1921）に広島高等師範学校で行った講義ノート「PlatoノStaatノ研究」が残されている。以上の資料から、村岡は生涯の一時期において、集中的に古代ギリシア哲学の研究に力を注いでいたことがわかる。

さらに付言すると、村岡は『本居宣長』のなかで、「欧洲文献学の由来とベエクの文献学。欧洲文献学の主張は、希臘羅馬学である。ベエクによって、学問的成立を見るに至ったのは、長い歴史の結果である」と述べており（5）、自らの学問方法の拠り所となるアウグスト・ベックの文献学の基礎には「希臘羅馬学」があるという認識をもっていた。このような村岡の主張をみると、彼の研究方法に影響を与えた文献学に関する理解を検討するためには、古代ギリシア哲学に関する理解もあわせて考察する必要があるといえるだろう。

村岡の学問形成という視点をこえて、より広く近代日本における西洋哲学・倫理学の受容という観点から考えてみよう。近代日本におけるプラトンの思想の受容をめぐる、納富信留氏は、以下のように述べている。

概して、明治以来日本に導入された他の西洋哲学者と比べて、プラトンの影響力が特に大きかったとは言えない。明治前期には、コントの実証主義、スペンサーの社会進化論、J・S・ミルの功利主義、ルソーの社会契約論などが爆発的に流行していた。その後は、カント、フィヒテ、ヘーゲルらのドイツ観念論が主流となり、ニーチェやマルクスも多くの信奉者を得ていた。これらの哲学者に匹敵する位置を、プラトンは日本思想史において占めてはこなかった。それゆえ、近代日本におけるプラトンやギリシア哲学の受容は、研究者の関心を惹いてはこなかったのである。（6）

納富氏は、近代日本における西洋哲学の受容は、コントの実証主義、スペンサーの社会進化論、ミルの功利主義、ルソーの社会契約論の受容から、ドイツ観念論、ニーチェやマルクスの思想の受容が主流を占め、プラトンをはじめとした古代ギリシア哲学の理解については研究がなされてこなかったと指摘している。その上で、「しかし、『ポリテイア』を焦点に置くと、時代の学問・理想を形づくった論者たちが線で結ばれ、西洋哲学受容の底流を垣間見せてくれる。それは、欧米での『ポリテイア』への圧倒的な関心を睨みながら、それと向き合って「理想国」を思索しようとする近代日本の葛藤の軌跡でもあった」（7）というように、プラトンの『ポリテイア』に焦点をあてた研究を通して、近代日本における西洋哲学の受容について新たな地平が切り開かれると述べている。納富氏の主たる検討対象は近代日本の哲学者であり、もちろん村岡に関する言及はない。哲学者とは異なる日本思想史研究者である村岡の古代ギリシア哲学理解を検討することは、近代日本における古代ギリシア哲学受容の様相をより豊かに描くことに通じる作業となるのではなかろうか。

以上の点をふまえると、村岡典嗣における古代ギリシア哲学理解の検討は、村岡の学問形成や方

法論を新たな角度から照射するのみならず、近代日本における古代ギリシア哲学の受容という問題につながることになる。このような問題意識をもって、本稿では村岡の古代ギリシア哲学理解を検討する一環として、大正10年（1921）に広島高等師範学校で行った講義ノート「PlatoノStaatノ研究」を素材として考察することとした。

2、広島高等師範学校における村岡典嗣

村岡典嗣が大正10年（1921）に広島高等師範学校で行った講義ノート「PlatoノStaatノ研究」の具体的な検討に入る前に、広島高等師範学校において村岡の置かれた状況などを考察し、講義ノートを分析していくための一助としたい（8）。

広島高等師範学校は、勅令98号により、明治35年（1902）4月に設置された。明治30年10月に公布された「師範教育令」（勅令346号）によれば、高等師範学校とは、「師範学校尋常中学校及高等女学校ノ教員タルヘキ者ヲ養成スル所トス」（9）というものであった。

大正4年（1915）2月、文部省令によって高等師範学校規程が改定され、本科（4年）を文科・理科とわけ、さらにそれぞれを以下のように3部に分割した。

- 文科——第一部（漢文）
 - 第二部（英語）
 - 第三部（甲部：法制経済 乙部：歴史地理学）
 - 理科——第一部（数学）
 - 第二部（物理学・化学）
 - 第三部（博物学）
- （10）

村岡が着任する前年の大正7年（1918）には、「国民道徳、兼テ教育一般ニ関スル事項ヲ研究ス」（11）という目的を有する徳育専攻科が設置された。徳育専攻科とは、「高等師範学校卒業以上ノ程度ニ於テ精密ナル学修ノ為ニ之ヲ設ク」というものであり（12）、入学の対象者は、「高等師範学校本科、文科、理科卒業生」、「内外国大学卒業生」、「高等学校卒業生」、「師範学校官立中学校若クハ文部大臣ニ於テ徴兵令第十三条ニ依リ中学校ノ学科程度以上ト認メタル私立中学校ヲ卒業シ又ハ之ト同等以上ノ学力ヲ有シテ師範学校中学校高等女学校ノ教員免許状ヲ有スル者」と定められていた（13）。

徳育専攻科の就学年数は、2年で構成されていた。第1学年では、修身（日本道徳、東洋道徳、西洋道徳及倫理学）、教育学、心理学、哲学、社会学、法制経済、国史を学び、第2学年になると、「日本道徳及東洋道徳ヲ主トスルモノ」・「西洋道徳及倫理学ヲ主トスルモノ」・「教育学及心理学ヲ主トスルモノ」の3つのコースにわかれて研究を進めるという組織となっていた（14）。

年度ごとに広島高等師範学校の概要を記載している『広島高等師範学校一覧』には、当該年度の所属職員を記載している箇所がある。大正8年度の『広島高等師範学校一覧』では、村岡の担当は「修身、独語」と記載されているが、大正9年度には「修身」、大正10年度には「修身、哲学」と変化していることがわかる。村岡の専門を考えれば、担当となっていた「修身」では主に日本道徳を教授していたと推察できる。しかし、「PlatoノStaatノ研究」を講義した大正10年度は「哲学」も担当するようになっていたことを考えると、この年度は日本に関する内容のみならず、西洋哲学に関する講義を担当する状況に置かれていたと考えることができるだろう（15）。

東北大学史料館所蔵「村岡典嗣文書」に収められている広島高等師範学校における講義ノートを見ると（表1）、村岡は上記の徳育専攻科での講義に関するノートが最も多く残っている（16）。

表1 「村岡典嗣文書」所蔵の広島高等師範学校における講義ノート

村岡典嗣文書史料番号	資料名	年代	内容	備考
村岡I-2	源氏物語の思想	大正9年9月～大正10年3月	序論、第1章「恋愛観」、第2章「栄誉観」、第3章「仏教思想」、第4章「教養観及び道徳思想」、第5章「自然観」、第6章「結論」	徳育専攻科講義ノート
村岡I-3	日本道徳史上世の研究	大正9年	序、第1章「上代道徳史」、第2章「太古ノ思想」、第3章「上世ニ於ケル道徳意識ノ発達」	
村岡I-4-1	日本道徳史	大正10年～11年	序論、前編「日本道徳思想史ノ学問的性質トソノ研究法」、後編「上世道徳思想ノ研究」第2章「太古ノ道徳」序まで。以下「村岡I-7」に続く。	徳育専攻科講義ノート第3回草稿
村岡I-4-2	日本道徳思想史概論	大正10年～11年	序説、第1章「前紀」（太古～戦国時代）、第2章「後紀」（徳川時代）、結語	徳育専攻科講義ノート第2回草稿
村岡I-7	神道史概論第二冊、日本道徳史第二冊	大正10年～11年	神道史概論は「村岡I-5」の続き。第6章「俗神道及ヒ教祖神道」、結論。日本道徳史は「村岡I-4-1」の続き。第2章、第3章「上世前期ニ於ケル道徳意識ノ発達」。	徳育専攻科講義ノート第3回草稿
村岡I-6	神道史概論、PlatonノStautノ研究	大正10年	序論、第1章「古学神道ノオコルマデノ概観」。ノート後半は「PlatonノStautノ研究」。	後半の「PlatonノStautノ研究」が、大正10年度の講義。このノートの記述は途中であり、村岡典嗣文書「村岡II-5」に続きの部分の記述がある。
村岡I-5	神道史概論	大正10年～11年	序論、第1章「太古、上世、中世ノ概観」、第2章「徳川前期ノ神道説」、第3章「古学神道」、第4章「古学神道ノ神学的発展」、第5章「古学神道ノ神学的発展 其ノ二」第4節の途中まで。	徳育専攻科講義ノート

※東北大学史料館「村岡典嗣文書目録」をもとに作成。

このことから、村岡は主に徳育専攻科の日本道徳に関する講義を担当していたことを裏づけることができる。さらに、本稿で取り上げる「PlatoノStaatノ研究」にも、「大正十年第一学期 於広島高等師範学校徳育専攻科」(17)と記されており、徳育専攻科における講義であったことがわかる。

表1からわかるように、村岡の広島高等師範学校における講義内容は、「日本道徳史」「神道史概論」という通史・概説が中心であり、ほかに『源氏物語』の講義ノートもある。これらの講義は日本道徳を担当し、また『本居宣長』を執筆した村岡であれば、当然の内容といえる。これらの講義ノートに対して、「PlatoノStaatノ研究」という講義は現存する広島高等師範学校と東北帝国大学における講義ノートを見渡しても、唯一の西洋哲学に関する内容をもつという点で異色である。

「PlatoノStaatノ研究」の講義が行われた大正10年(1921)は、村岡が広島高等師範学校で講義を行った最後の年度である。大正10年度の第1学期に行われた講義のノートとしては、「PlatoノStaatノ研究」と「神道史概論」「日本道徳史」が残されている。このうち「日本道徳史」の講義について、大正9年度に行ったノートと大正10年度の講義ノートが現存しており、さらに大正10年度の講義ノートには第2回訂正草稿と第3回訂正草稿の2種類のノートがある。これらの講義ノートを比較すると、大正9年度と大正10年度において、村岡の講義に臨む姿勢の相違が浮かび上がってくる。

大正9年度の「日本道徳史」と大正10年度・第2回訂正草稿では、講義の構成がそれぞれ以下のようになっている。

大正9年度

序、第1章「上代道徳史」、第2章「太古ノ思想」、第3章「上世ニ於ケル道徳意識ノ發達」(18)

大正10年度・第2回訂正草稿

序説、第1章「前紀」(太古～戦国)、第2章「後紀」(徳川時代)、結語(19)

一方、大正10年度・第3回訂正草稿の構成は、以下の通りである。

緒言

序論

第一節 国民道徳テフ概念ノ意義

第二節 日本道徳思想ノ歴史的研究ノ意義ト目的

前編 日本道徳思想史ノ学問的性質トソノ研究法

第一章 文献学トシテノ考察

第一節 Philologieノ学問的成立トソノ本質

- 第二節 我国ニ於ケル古学ノ一
- 第三節 我国ニ於ケル古学ノ二
- 第四節 我国ニ於ケル古学ノ三
- 第五節 我国ニ於ケル古学ノ四
- 第六節 結論
- 第二章 史的文化学トシテノ考察
 - 第一節 学問ノ分類ト史的文化学
 - 第二節 史的文化学ノ本質ト国民道德史
 - 第三節 歴史的客観性
- 第三章 日本道德史ノ研究方法
 - 序 研究方法ヲ考フルノ必要
 - 第一節 研究資料ノ整理
 - 第二節 研究資料ノ积義及ヒ了解
 - 第三節 研究ノ实际的態度
- 後編 上代道德思想ノ研究
 - 序 日本道德史ノ区劃ト上世ノ範圍
 - 第一章 上世道德思想ノ quellen トソノ批判
 - 第二章 太古ノ思想
 - 第三章 上世前期ニ於ケル道德意識ノ發達 (20)

一見してわかるように、大正10年度・第3回訂正草稿においては、「前編 日本道德思想史ノ学問的性質トソノ研究法」という編が置かれており、研究方法に関わる記述に紙幅の多くがさかれている。この点に関連して、大正10年度・第3回訂正草稿の「緒言」にみられる村岡の以下の主張に注目したい。

開講ニ当ツテ一言スル。日本道德史ノ題目ノモトニ本学年ニ於イテ論スルトコロハ、ソノ学問的性質、研究法及ビ上代史ノ研究デアル。而シテ本講義ニ於ケル吾人ノ態度トシテハ、特ニ Sein wissenschaftlich トイフコトヲ力説シナケレバナラス。特ニ学問的性質ヲ論シ、研究法ヲ述ヘル精神モ又ココニ存スル。(21)

村岡は自身がこの講義に臨む態度として「Sein wissenschaftlich」、すなわち「科学的」であることを強調している。このような態度で講義に臨むことから、日本道德史の学問的性質や方法論について言及する必要があるというのである。以上のような主張は、大正9年度のノートと大正10年度・

第2回訂正草稿にはみられない記述である。

さらに、村岡は以下のように学生に注意を喚起している。

以上ノ考察ハ自然ニ吾人カ講義ノ性質ト諸君カ聴講ノ用意トヲ規定シ指示スルモノガアル。新
タナル学問ヲ根本的ニ建設シヨウトイフノテアルカラ、勿論ニハカニ又一人ノカラ以テ完成ヲ
期スヘキテナイ。随ツテ吾人ノ講義ハ必然的ニ研究ノ方法ニツイテ重キヲオカネハナラス。
methodeハ学問ニ於テ最モ重要ナ基礎テアル。学問的ナmethodeノ上ニ成立サレタ知識ニ
シテハシメテ学問的性質ヲ要求シウル。而シテ諸君カ聴講ノ用意モ又単ニ既成ノ知識ヲ受入レ
ルトイフ態度テナクテ、ドコマテモトモニ能動的ニ研究スルトイフノテアラネバナラス。相ト
モニスル真理ノ探求、ココニ凡テノ学問ノ意義ハ存シ、又学問教育ニオケル講義ノ意義カ存ス
ル(講義ハ百科全書的知識ヲ与フルヲ目的トセヌ)。要スルニコレ研究的ノ一語ニツキル。(22)

この講義は、新しい学問を構築するために研究方法に重点を置いてなされる。それゆえに、この講義は、教官から学生へと知識を一方向的に伝え、学生がそれを理解すればよいというものではない。学生自身が主体的に研究する態度をもって受講することを求めるものである。それを一言で表現すれば、「研究的」な講義を行うということである。村岡は学生に対して受動的な受講態度ではなく、「真理探求」のために研究的な態度をもって講義に臨むことを求め、そのような内容の講義を構想していたのである (23)。

以上のような点をふまえると、大正10年度は、村岡の講義に臨む意識に変化が生じた時期であることがわかる (24)。こうした時期に「PlatoノStaatノ研究」という講義も構想されていたということに留意しておく必要があるだろう。

1、「PlatoノStaatノ研究」について

前節までの検討をもとに、本節では「PlatoノStaatノ研究」という講義ノートについて、具体的に考察していくことにしたい。

はじめに資料の形態などに言及しておきたい。村岡の「PlatoノStaatノ研究」の講義内容を記した資料は、2つのノートにわかれて書かれている。ひとつは、表1にある通り、資料番号「村岡I-6」のノートである。このノートの前半には広島高等師範学校における「神道史概論」の講義内容が記されており、後半に「PlatoノStaatノ研究」の講義内容が書かれている。このノートに書かれた「PlatoノStaatノ研究」の末尾には「以下別冊ニツク」とあり、続きの内容をほかのノートに記したことが示唆されている。この「別冊」に相当するノートは、「村岡典嗣文書」に所収された「村岡II-5」の資料である。このノートには、「Plato Staatの研究 別冊ノ続き」という記述があり、プラトンの『国家』に関することが書かれており、「村岡I-6」のノートの続きの内容であ

ることがわかる。この「村岡Ⅱ-5」のノートには、「Plato Staatの研究 別冊ノ続き」以外に、大正10年（1921）1月の『哲学研究』に寄稿した「古神道に於ける道德意識とその発達」の「第一草稿」、会沢正志斎の著書目録、吉田宇之助『報徳要論』（明治38年・1905）の目次メモ、村岡本人の履歴に関する記載（大正10年2月23日までの履歴）などが記されている。以上のように、村岡の「PlatoノStaatノ研究」という講義の内容を示す資料は、二つのノートに分割されて残されている。

内容を検討するうえで、まず確認しておきたいことは、この講義の性格に関する記述である。

コ、ニハ彼ノ主著ナルRepublicノ講読ヲナスノテアルガ書物カ間ニ合ハヌ故今学期ハソノ序論トシテ彼ノ哲学、著書ノ概観カラRepublicノ梗概等講読ノ準備トシテ必要ナ知識ヲノバル。但シ彼ノ学説ノ歴史的意義ヲハシメ彼ノ学説ノ詳細ナコトハ哲学史ニユツリ、一般哲学史テハ余リ論スル暇ノナイコトニツイテ述ヘル。(25)

この資料からわかるように、「PlatoノStaatノ研究」という講義は、いわゆる講義形式の授業ではなく、「Republicノ講読」を目的としたものであった。しかし、講読を目的とした講義であったにもかかわらず、「書物カ間ニ合ハ」ないため、第1学期は講読の準備として必要な知識を解説するというのである。

次に講義の構成について、注意を向けておきたい。この講義の構成について、村岡は以下のように記している。

Republic 講読ノ序論

緒言

第一章 Platoノ伝記及び性格

第二章 Platoノ著書トRepublicノ位地

第三章 Republicノ梗概 (26)

プラトンの伝記と彼のひととなりについて解説し、その後にプラトンの著書および『国家』の位置づけ、そして『国家』の内容に言及するという構成であり、オーソドックスな講義内容にみえる。この点に関連して、村岡の主著である『本居宣長』の構成を確認しておきたい。

村岡の『本居宣長』は、大きく「第壹編 宣長伝の研究」と「第貳編 宣長学の研究」にわかれている(27)。第1編の宣長の伝記研究は、上記の「第一章 Platoノ伝記及び性格」に相当するものである。第2編の宣長学の研究では、①宣長の学問概念および古典研究の態度、②著書の概観とその内容の整理、③宣長学の意義、④近世古学における位置づけという4つの内容が述べられているが、思想家の著作の概観を紹介し、内容を整理し、それぞれの書の位置づけを行うという姿勢は、

上記の第二章と第三章の構成と通じるものがある。こうした点をふまえると、「PlatoノStaatノ研究」という講義の構成は、村岡の主著である『本居宣長』の著述態度と共通する点を有しており、村岡の学問的な態度を示す形式を取っているといえる。すなわち、自分の担当分野である日本道徳とは一見すると直接的な関係が希薄なプラトンの『国家』に関する講義とはいえ、村岡は片手間のいい加減な姿勢で取り組んでいたわけではないと推察される。

以上の点に関わることとして、原田隆吉氏は、村岡の『本居宣長』執筆について、「ヴィンデルバンドの「プラトン」に学ぶところがあつたのは明らかで、前半が宣長伝の研究、後半が宣長学の研究となっているのは、「プラトン」がその人の面と、その哲学の面とに二大別されているのと全く同様である」と指摘している (28)。この点については、村岡がいつヴィンデルバンドの『プラトン』を読んだのかということを確認する必要があり、今後のさらなる調査を要する。そのため、現時点では「PlatoノStaatノ研究」には「Platoニ関スルmonograph」として、ヴィンデルバンドの『プラトン』が挙げられていることを指摘するにとどめておきたい。

村岡がこの講義に対して片手間に臨んでいたわけではないことは、本講義に関わる翻訳や参考文献として挙げた書物にもうかがえる。村岡は『国家』の翻訳として、第一に「The Deal of Plato 5 vols Oxford 1892 Jowett」を挙げ、そのほかに、ケアリー、バージェス、デイビスの英訳である「Plato's works」、シュライエルマッハーの「Platons Works」を紹介している。「The Deal of Plato 5 vols Oxford 1892 Jowett」とは、ベンジャミン・ジョウエットの『プラトン対話篇集』第三版のことであり、19世紀後半において最も定評のある書とされている (29)。

また、参考とすべき研究書としては、「Platon全汎ニ関スルモノ」として、E.Zeller“Grundriss der Geschichte der griechischen Philosophie”と“Die Philosophie der Griechen”、「Platoニ関スルmonograph」として、G. Grote“Plato and the other companions of Socrates”、C.Ritter“Platon”、A.E.Taylor“Plato”、Wilamowitz-Moellendorff“Platon”などを挙げている。以上の書物は、たとえば、『プラトン全集』第15巻の「文献案内」において、「プラトンの生涯・著作・思想及び背景などを全般的に知」るために列挙されている代表的な著作である (30)。

以上のように見てくると、村岡は当時のプラトン研究においてふまえるべき翻訳や参考文献をもとに講読を進めようとしていたことがわかる。ここからも、村岡がこの講義に対して、いわば「研究的」な態度をもって臨んでいたということができさるだろう。

次に村岡のプラトン評価について言及しておきたい。村岡がプラトンを捉える眼差しとして注目しておきたい点は、以下のような言説である。

知識ノ明ラカサト芸術ノ美シサトノイミシキ調和ヲ示シタPlatonノ思想ノウチニサラニ一味ノ深ミヲ与ヘテキルモノハ彼ノ宗教思想デアル。(31)

村岡がプラトンの思想において注目するのは、その知的営みや芸術的な感性およびそれらの調和によって生み出された内容のみならず、「宗教思想」の側面である。村岡はプラトンの思想の本質に「来世的信仰」があることを指摘し、この信仰が「哲学化サレ」たことにより、彼の思想が深化したと理解している(32)。そして、こうした考察をもとに、「カクノ如キ彼ノ思想ニ現ハレタ彼ノ人格ノ一面ハ現世以外ニ真ノ生活ヲ求メヤウトスル傾向テアル。コノ点ニ於イテ彼ハ神学者テアリ、又聖者テアツタ。而シテ宗教性ハ更ニ彼ノ人格ニ現ハレテツノ預言者的風格トナツタ」(33)と、プラトンの人格の本質を「預言者的風格」と捉えていくのである。このように思想家の本質に宗教的な要素を見いだしていく姿勢は、たとえば本居宣長の人格を評して、「宣長の人格の、かくの如き徳は、果して何処に基づくかといへば、蓋し、彼の人格の、本質に於いて貴むべき敬虔なる心情があつたからである。彼が人格をなした以上の特質は、何れも、彼の敬虔なる至情の発現として、存在してゐる」(34)と述べている点と通じ合うところがある。

ここで注意しておきたいことは、プラトンの人格の本質を「預言者的風格」と捉えるのは、村岡の専売特許ではないということである。村岡が早稲田大学時代に薫陶を受けた波多野精一は、以下のように述べている。

彼(プラトンのこと-筆者注)の学説は決して冷静なる考察に出しにあらで、むしろ 満腔の熱誠に迸発たり。彼が真理を認識せんとせしは認識の為にあらで、そを實行せんが為なりしなり。彼の終世の事業は、形体の世界に執着せる希臘人に形体以上の真理を説教し、彼等を覚醒し警戒し、以て形体以上の生活に趨向せしめんとする努力に存したり。彼の脈管に預言者の熱血の流れ居たりしは疑ふべくもあらざるなり。(35)

この一文は、波多野がプラトンの『国家』について言及した部分のまとめにあたる箇所である。波多野によれば、プラトンは「当時希臘は国運衰頽に向ひ、国家の紀綱弛み国民の道德地に墮ち」た状況を憂えて理想的国家について説いたのであり(36)、そのプラトンの考究を支えていた熱源として、人々を形体を超えた真理に向かわせようとする「預言者」的な血潮に注目するのである(37)。ちなみに、戦前における唯一のプラトンの著作の翻訳書を手がけた木村鷹太郎は、初版(明治36年・1903~明治44年・1911刊行)の全集第1巻でプラトンの『ポリテイア』について、「日本の武士道に酷似す」と述べ、大正13年(1924)から再版された全集では「愛国至誠の軍国主義の哲学者なり」という評価をしている(38)。

それでは、プラトンの著作について、村岡はどのように考えたのであろうか。村岡は、「Platonノ著書ノ特質ハソガ殆ント全部問答式テカ、レテアルトイフコトデアル」(39)と述べ、プラトンの著作の特質として問答体という文体に注目している。問答体は、質問者と回答者を登場させ、問いかけとそれに対する回答で議論を進めていくスタイルである。こうした問答体は、村岡が「単ニ

問答躰トイヘハ仏典モサウデアアル。支那ノ古典ヲサウデアアル」(40)と指摘するように、仏教の経典や中国の古典にもみられる形式である。こうした仏典や中国古典と異なる点は、「Platonノ問答躰ハソレラトハ違ツテソノ問答ノイツレノ場合ニオイテモPlatonソノ人カ全然自ラ語ツテラヌ。作者ハ全然背後ニカクレテ他ノ人々ノ問答ニ於イテ何分ノ説ヲノヘテキル」(41)というように、プラトン自身の口から語られる言葉がないという点である。こうした問答体の性格から、村岡はプラトンの著作を「Drama」と捉え、「Sokratesカ対人的対話トAristotelesカ純学問的学説ヲ開展シテユク叙述トノ間ノ中間ノ位地ヲ占ムルモノトシテ又一種ノ興味ガアル」(42)というように、ソクラテスとアリストテレスの表現形式の中間に位置づけるのである。プラトンの著作を日本語へ翻訳する際に、大きな障壁となったのが対話形式の文体であったことを想起すると(43)、村岡がプラトンの著作の有する特質として問答体に注目したことは、プラトンの著作のもつ本質の一端を精確に把握していたことを物語るものであろう。

さらに、村岡はプラトンの『国家』について、以下のように述べている。

ソノ中ニ含メラレタル思想ハIdeenbhreヲ中心トシテ、彼ノ倫理説、教育論、政治論又宗教論ノ全汎ニワタリ、Platoノ思想ヲ全汎ニワタツテノヘタ。(44)

ここで、村岡は、『国家』という書にこそ、プラトンの倫理、教育、政治、宗教に関する所論の全体が述べられており、その点において、プラトンの思想の全貌が包含されていると考えていることがわかる。村岡は、当時において参照すべき翻訳や研究書をふまえ、「研究的」な態度をもって、プラトンの思想の全貌を学生とともに読み解こうとしていたといえよう。

むすびにかえて

本稿は、村岡典嗣の古代ギリシア哲学理解を検討する一環として、大正10年度に広島高等師範学校で行った講義ノート「PlatoノStaatノ研究」について考察してきた。こうした検討を通して、明らかにしたことは、以下の3点である。第1点は、村岡のプラトン研究は、彼の日本思想史研究の方法と共通する視座からなされているということである。彼の主著である『本居宣長』と「PlatoノStaatノ研究」の構成は、評伝研究と著書概観・位置づけという点で共通している。これは、村岡の思想家個人の研究を行う手法である。

第2点は、村岡がプラトンの人間的本質に「宗教性」を見いだそうとしていたということである。このような思想家個人のもつ宗教的資質への眼差しは、すでに『本居宣長』にもみられるものであるが、同時代のプラトン理解の中では異質な要素を有している。この点については、波多野精一をはじめ、ヴィンデルバントの『プラトン』の受容など、今後さらに広く考察していくことを要するが、近代日本のプラトン理解の一つの類型として位置づけていくことも可能であろう。

第3点は、村岡がプラトンの著作の特質として問答体に注目していたということである。この点は、近代日本において、プラトンの著作を日本語へ翻訳する際に、大きな障壁となったのが対話形式の文体であることをふまえると、日本思想史研究者であるとはいえ、村岡のプラトン理解がその本質に迫りうるものであったことを物語る点といえる。

村岡のギリシア哲学研究はプラトンのみではなく、むしろヘラクレイトスに関する資料が多く残されている。はじめに述べた「Herakleitosの研究」(明治41年・1908、村岡Ⅱ・1-1)は早稲田哲学学会における講演原稿であり、「[ギリシア哲学関係原稿]」(大正5年・1916、村岡Ⅱ・1-2)にはヘラクレイトスに関する資料メモが記されており、「Herakleitos」(大正5年・1916、村岡Ⅱ・1-3)と「Herakleitosノ哲学ノ研究」(作成年不明、村岡Ⅱ・1-4)も章構成をきちんと有する原稿である。以上の点をふまえると、村岡の古代ギリシア哲学理解は、ヘラクレイトスに関する彼の見解を検討することを通して、その全体像がみえてくると考えられる。こうした展望をもちつつ、ひとまず稿を終えることとしたい。

〈註〉

- (1) 村岡の生涯に関しては、池上隆史氏による詳細な年譜がある(『村岡典嗣年譜』(1)～(4)、『日本思想史研究』34・35・37・38、2002年・2003年・2005年・2006年。また「村岡典嗣年譜—東北帝國大學文化史學第一講座着任から日本思想史學會成立まで—」(上)・(下)、『年報日本思想史』2・3、2003年・2004年)。
- (2) 先行研究としては、①については家永三郎「日本思想史学の過去と将来」(『日本思想史の諸問題』斎藤書店、1948年)、梅沢伊勢三「村岡典嗣教授における思想史の方法—特に価値観と歴史叙述の関連について—」(『日本思想史学』6、1974年)、原田隆吉「村岡典嗣」(永原慶二ほか編『日本の歴史家』、日本評論社、1976年)、玉懸博之「村岡典嗣」(今谷明ほか編『20世紀の歴史家たち』2、刀水書房、1999年)、田尻祐一郎「村岡典嗣と平泉澄—垂加神道の理解をめぐって—」(『東海大学文学部紀要』74、2000年)、前田勉「解説」(村岡典嗣著・前田勉校訂『新編日本思想史研究—村岡典嗣論文選—』、平凡社、2004年)、②については新保祐司『日本思想史骨』(構想社、1994年)、畑中健二「村岡典嗣の国体論」(『季刊日本思想史』63、2003年)、高橋章則「村岡典嗣の「文献学」と聚書」(『季刊日本思想史』63、2003年)、高橋禎雄「村岡典嗣著増訂版『本居宣長』をめぐると、三の問題—昭和2年自筆原稿の分析を中心に—」(『近代史料研究』5、2005年)、安酸敏眞「村岡典嗣と波多野精—饗応する二つの「学問的精神」—」(『北海学園大学人文論集』39、2008年)、昆野伸幸「村岡典嗣の中世思想史研究」(『季刊日本思想史』74、2009年)、③については註1池上前掲論文、④については『季刊日本思想史』74「村岡典嗣—新資料の紹介と展望」(2009年)所収の資料翻刻、本村昌文・中嶋英介「翻刻 村岡典嗣『古事記序文講義』」(『日本思想史研究』41、2009年)、本村昌文・中嶋英介「資料紹介

村岡典嗣「仙台の吉利支丹について」(『東北大学史料館紀要』5、2010年)、本村昌文「村岡典嗣と広島高等師範学校－村岡典嗣文書所収の講義ノート－」(『東北大学史料館紀要』6、2011年)等がある。

- (3) 村岡の確立した方法論の客観的側面に注目するのは、註2家永および梅沢前掲論文、村岡の方法論のもつナショナリズム性、その限界と可能性を指摘するのは、註2田尻および前田前掲論文。また、②の研究では、村岡の思想分析にキリスト教をはじめとした宗教哲学からの影響があること(註2新保前掲書)、村岡の師にあたる宗教哲学者の波多野精一との関係が検討されてきた(註2安酸前掲論文)
- (4) 原田隆吉氏は、村岡が早稲田大学入学後に波多野精一の教えに接し、大きな影響を受けたことを指摘し、「村岡の哲学的関心は、もっとも純粋な叡智の世界であるギリシャ哲学にむかい、またサバティエの宗教哲学概論やヴィンデルバンドのプラトン(波多野精一の共訳を刊行)などの研究にむかった」と述べ、村岡の西洋哲学への関心について言及している(註2前掲論文)。さらに、村岡の『本居宣長』について、「この書は上述した、ヴィンデルバンドの「プラトン」に学ぶところがあったのは明らかで、前半が宣長伝の研究、後半が宣長学の研究となっているのは、「プラトン」がその人の面と、その哲学の面とに二大別されているのと全く同様である。新カント派哲学における歴史学・文化科学と哲学との親近性を考えれば、これは日本の哲学史家としての注目すべき一歩がふみ出されたというべきであろう。しかしこの書は村岡をそこにとどまることをゆるさなかった。……新カント派を一歩出た、あるいはより具体化しより広範化した理論が要求されてくる。ここに進んで文献学的方法が必要となった。……この『本居宣長』をめぐって上述した三つの立場、新カント派と本居と文献学とがどのように結びあっているかは、もっとも興味深い問題であるが、それは別稿にゆずる」と述べ、村岡の研究方法に新カント派と文献学の影響をみとめ、その関係を検討することの必要性を指摘している(註2前掲論文)。なお、管見の範囲では、村岡はヴィンデルバンドの『近世哲学史』の翻訳は刊行しているが、『プラトン』の翻訳を波多野と共同で刊行していたかどうかは不明である。

また、安酸敏眞氏は、「『本居宣長』を上梓してから三年ほど経っているので、宣長研究に一段落ついてからこの翻訳に取りかかったものと思われるが、一方で日本思想史研究に励みながら、他方で新カント学派の泰斗ヴィンデルバンドの哲学史の翻訳に挑んだのであるから、この時点までの村岡は、いわば両刀遣いで、西洋の宗教・哲学思想と日本思想史の両方を追求していたことになる。この状態がいましばらく続いたことは、村岡が宮本和吉・高橋穰・上野直昭・小熊虎之助編集の『増訂版 岩波哲学辞典』(大正11年、昭和2年増言)版第五刷)に、主に神道関係の多くの項目にまじって、「アナクサゴラス」、「エレア学派」、「ピタゴラス及びピタゴラス學徒」、「ヘラクレイトス」について執筆していることと、大正10(1921)年に広島高等師範学校でプラトンの国家論について講義していることからわかる。村岡の学殖の広さには

舌を巻かざるを得ないが、このように西洋哲学史に通じていることが、後年の村岡の日本思想史家としての活動の大いなる強みとなったことは間違いない」と、西洋の宗教・哲学思想と日本思想史の双方の学究に励んでいたことを指摘し、その裏付けとして、『増訂版 岩波哲学辞典』の項目執筆と、本稿で取り上げる広島高等師範学校におけるプラトンの『国家』に関する講義に注目している（註2前掲論文）。なお、安酸氏がこの論文を発表された当時は、東北大学史料館に残されていた村岡典嗣関係資料は未整理のままであり、広島高等師範学校時代における講義ノートは明らかになっていなかったため、村岡のプラトンの『国家』に関する講義ノートを検討することはできない状況にあった。

以上のように、これまでの研究において、村岡の西洋哲学、とくにギリシア哲学への関心について、彼の日本思想史研究への影響が指摘されてはいるものの、事実の指摘にとどまり、具体的な検討は今後の課題として残されているといえよう。

- (5) 村岡典嗣著・前田勉校訂『増補本居宣長』2・pp.17-18（平凡社、2006年）。
- (6) 納富信留『プラトン－理想国の現在－』p87（慶應義塾大学出版会、2012年）。
- (7) 同上。
- (8) 以下の論考は、註2前掲拙稿「村岡典嗣と広島高等師範学校－村岡典嗣文書所収の講義ノート－」に部分的に言及したことがある。あわせて参照されたい。
- (9) 文部省編『学制百年史』資料編・P178（帝国地方行政学会、1972年）。
- (10) 『広島高等師範学校一覧』大正4年度（「広島高等師範学校諸規則」、広島大学文書館所蔵）。
- (11) 『広島高等師範学校一覧』大正7年度（「広島高等師範学校諸規則」、国立国会図書館所蔵）。
- (12) 同上。
- (13) 同上。
- (14) 同上。
- (15) なお、『尚志同窓会誌』第33号（大正8年12月17日刊、広島大学文書館蔵）には「新任教官紹介」の欄があり、そこに村岡を紹介する以下の記事が掲載されている。

先生は東京府の人、明治三十九年から早稲田大学の文科（哲学科）などに勤めて居られたが、本年五月母校に来られ、主として徳育専攻科の日本道徳を受持たれてゐる。

- (16) 創文社より刊行された『村岡典嗣著作集』の第4巻に、「村岡典嗣講義草案年表稿」が付されている（『日本思想史概説』、創文社、1961年）。そこでは、広島高等師範学校において、表1に挙げたもののほかに、大正8年に「日本道徳史－上世の研究－」・「本居宣長之学説」・「徳川時代教化概説」、大正9年に「古事記の研究Ⅱ」、大正10年に「忠君愛国思想の発達」という講義がなされたことと記載されている。このうち、大正8年「日本道徳史－上世の研究－」と大正9年「古事記の研究Ⅱ」に相当する資料は村岡典嗣文書の中には見いだせない。また、大正8年「本居宣長之学説」・「徳川時代教化概説」、大正10年「忠君愛国思想の発達」は、村岡典嗣

文書に同タイトルのノートが現存しているが、広島高等師範学校でなされた講義であるという記述がないため、広島高等師範学校での講義ノートかどうかを確認することができない。

- (17) 「Platoノ Staatノ研究」(東北大学史料館所蔵「村岡典嗣文書」、村岡 I -6)。
- (18) 「日本道德史 上世の研究」(東北大学史料館所蔵「村岡典嗣文書」、村岡 I -3)。
- (19) 「日本道德思想史概論」(東北大学史料館所蔵「村岡典嗣文書」、村岡 I -4-2)。
- (20) 「日本道德史」(東北大学史料館所蔵「村岡典嗣文書」、村岡 I -4-1)。
- (21) 同上。
- (22) 同上。
- (23) なお、引用資料中にある「百科全書の知識ヲ与フルヲ目的」とするものとして、村岡は「東西古今ノ書ニ就キテ其萃ヲ抜き要ヲ摘」む書である西村茂樹の『徳学講義』(明治26年・1893)を念頭に置いていたと考えられる(註2拙稿「村岡典嗣と広島高等師範学校-村岡典嗣文書所収の講義ノートをめぐって-」)。
- (24) こうした村岡の講義に対する姿勢の変化は、東北帝国大学への異動と関係があると推測されるが、この点については後考に期したい。
- (25) 「Platoノ Staatノ研究」(東北大学史料館所蔵「村岡典嗣文書」、村岡 I -6)。
- (26) 同上。
- (27) 以下、『本居宣長』の構成については、村岡典嗣著・前田勉校訂『増補本居宣長』1・2(平凡社、2006年)を参照した。
- (28) 註4参照。
- (29) 註6納富前掲書・p106。
- (30) 『プラトン全集』第15巻(岩波書店、1975年) pp.195-203。
- (31) 「Platoノ Staatノ研究」(東北大学史料館所蔵「村岡典嗣文書」、村岡 I -6)。
- (32) 同上。
- (33) 同上。
- (34) 村岡典嗣著・前田勉校訂『増補本居宣長』2・pp.170-171(平凡社、2006年)。
- (35) 波多野精一『西洋哲学史要』(『波多野精一全集』第1巻・p114、岩波書店、1968年)。
- (36) 同上。なお、波多野は大正9年(1920)8月20日の村岡典嗣宛書簡の中で、「プラトンの、Republicはひよっとすると拝借せねばならぬかと存居候」と述べている(『波多野精一全集』第6巻・P74、岩波書店、1969年)。村岡の「Platoノ Staatノ研究」が書かれた前年に波多野との間でプラトンの『国家』のことが話題になっていたことは、村岡の講義と何らかの関係があることを予測させるが、現時点ではこれ以上の手がかりを見いだしていない。後考に期したい。
- (37) 村岡と波多野がプラトンを「預言者」として捉えていく発想のもとには、ヴィンデルバント

の『プラトン』の影響がある。ヴィンデルバントは『プラトン』の最終章を、'Der Prophet'と題し（出隆・田中美知太郎の翻訳では「予言者としてのプラトン」と訳されている）、一つの新たなる真理を見だし、これを啓示として宣伝すべき人物として使命を帯びたプラトン像を示している（Vgl. Wilhelm Windelband, *Platon*, Stuttgart, 1920, S.170ff. 岡山大学附属図書館杏村文庫所蔵）。なお、ヴィンデルバントの『プラトン』は、出隆・田中美知太郎によって翻訳され、大正13年（1924）に刊行されている。今後、村岡と波多野を含めて、同書によるプラトン理解の諸相を検討していく必要があるだろう。

- (38) 註6納富前掲書・pp109-110。
- (39) 「PlatoノStaatノ研究」（東北大学史料館所蔵「村岡典嗣文書」、村岡Ⅰ-6）。
- (40) 同前。
- (41) 同前。
- (42) 同前。
- (43) 註6納富前掲書・pp73-80。
- (44) 「PlatoノStaatノ研究」（東北大学史料館所蔵「村岡典嗣文書」、村岡Ⅱ-5）。

【付記】

本稿は、科研費・基盤研究C「帝国大学における研究者の知的基盤に関する基礎的研究」（研究代表者：吉葉恭行）による成果の一部である。